

中国の研究機関との学術交流

林 宰司

環境政策・計画学科

筆者はここ数年、中国を研究のフィールドにしている関係で中国の研究者とのやりとりが多く、本学にも中国の研究者にお越し頂く機会があった。今号の特集に際し、中国の2つの研究機関との交流について紹介させて頂きたい。

社会科学院哲学研究所との学術交流

平成23年9月29日に本学にて、環境政策・計画学科の教員に加え、環境共生システム研究センターの仁連所長、湯川研究員に御参加頂き、中国社会科学院哲学研究所の研究者の方々と学術交流会議を開催した。契機は前年に湖南師範大学の朴成日教授が京都で開催された学会終了後に本学に来学された時に筆者が対応し、その際に朴先生の御友人である賈旭東教授が御一緒に来学されたのが始まりである。当時、朴先生は東京学芸大学の客員研究員、賈先生は東京大学大学院新領域創成科学研究科客員研究員でいらっしやった。

社会科学院哲学研究所の訪問メンバーは下記の6名である（敬称略）。

- 賈旭東 文化研究センター副主任
- 李景源 中国社会科学院学部委員、文史哲学部副主任、元哲学研究所所長
- 呉尚民 哲学研究所副所長
- 孫偉平 哲学研究所副所長、社会発展研究センター主任
- 単継剛 哲学研究所科研所所長、社会発展研究センター副主任
- 胡文臻 社会発展研究センター副主任

社会科学院からは、李先生が「生態経済と社会技術」、孫先生が「中国汝州杜仲循環経済産業生態系モデル基地」について、本学からは湯川先生が「滋賀県のマテリアルフロー」、魯希さん（博士前期課程）が「中国『圈区管理制度』の環境保護における費用便益」についてそれぞれ報告を行い、意見交換を行った。哲学研究所は、哲学研究とともにそれを実践・実証する研究も行っているようで、非常に興味深かった。

社会科学院の先生方は、本学での学術交流会議の他には、東近江市愛東町の菜の花プロジェクト、長浜市の街作りの実践例を見学された。

なお、先方の訪問の目的のもう1つは、社会技術と循環経済都市の日中比較分析について、日本学術振興会の二国間共同研究の枠組みで応募申請する協力相手機関を探すことであり、オファーを頂いたが、残念ながら申請の締め切りまでに時間が非常に短かったことなどから、実現には至らなかった。今後はこうしたオファーにも迅速に対応できるような仕組み作りが必要である。

華南環境科学研究所との学術交流

平成24年8月27日に中国環境保護総局（環境省に相当する）の下にある華南環境科学研究所の研究者の方々が本学に来学され、環境共生システム研究センターにてマテリアルフロー会計の研究について意見交換を行った。訪問メンバーは下記の4名である（敬称略）。

- 董家華 高級工程師
- 陳志良 高級工程師
- 全鼎余 高級工程師
- 房功麗 助理工程師

本学に来学の他には、東近江市愛東町の菜の花プロジェクト、大阪府枚方市の(株)ハマダにおける廃電子機器のリサイクルに関して見学をされた。なお、(株)ハマダには環境政策・計画学科の卒業生が2名就職の実績のある企業である（見学時点では2名とも既に寿退社とのことであった）。

華南環境科学研究所との交流が始まったのは、平成24年3月に環境科学研究科環境計画学専攻博士前期課程を修了した魯希さん（現在、名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程）の修士論文のための調査でお世話になったときからである。中国のリサイクル工業団地の現地調査をするために、知人の知人、さらに知人と伝手をたどってのことであった。現地調査を行ったのは平成23年3月のことで、筆者も同行したが、華南環境科学研究所の연구원の方には、現場まで1つ1つ同行してご案内して頂いた。

また、平成25年3月27日から31日の間、筆者の科学研究費「日中間再生資源貿易・リサイクル産業の環境経済分析」のための調査の目的で華南環境科学研究所を訪問するとともに、広東省肇啓市のリ

サイクル工業団地の調査を行った。28日は相互に研究内容について報告し、意見交換を行った。29日午前には岳建華所長と面会、29日午後と30日はリサイクル工業団地の調査を行った。

今回の訪問は、次年度の調査協力の相談もあったため、私的に贈り物を持っていったのであるが、そこでちょっとしたエピソードがあったので、合わせて紹介しておきたい。中国の研究機関に訪問した際や、中国の研究者が日本に来る際には、お土産としてその研究機関やその地の歴史に関わるような品を頂くことが多い。そのため、今回、贈り物として持っていく品として、井伊家の赤備えのレプリカなどないかと彦根・長浜界隈を探し回ったが皆無であった。困り果ててインターネットで検索したところ、信楽焼で井伊直政の兜を作っている窯元があることを知り、信楽町はギャラリー Ogama まで駆け付けた。そこで接客してくれたのが、本学部建築デザイン学科卒の盛千嘉さんで、筆者はそこではじめてその場にある登り窯と建物が本学近江楽座のプロジェクト「信・楽・人」によるものであることを事後的に知ったのであった。そのような訳で、華南環境科学研究所の岳所長とのお話においても、手土産を通じて本学の地域貢献事業についてもお話することができ、贈り物として相応しいものとなった。

岳所長はイギリスで学位を取られた国際派で、中国での恩師は日本の環境アセスメント分野で著名な島津康男先生と親交が深かったため、岳所長も日本には何度か滞在したことがあるとのことであった。10年ほど前には福岡に10日間ほど滞在した経験がおありだそうで、信楽焼の兜を見て九州でお城を見学したのを思い出したとおっしゃっていた。現在、新しい研究棟を建築中で、完成後はそちらに展示して頂けることになった。

なお、華南環境科学研究所では、現在、国際研究交流を進めているところであり、是非、今後は滋賀県立大学との間に機関同士で学術交流協定を結びたいとのオファーがあった。

国際交流上の課題

中国に限ったことではないが、海外との学術交流には、文化的・制度的な違いが障壁になることが多い。また、交流ができた相手を通じて、別の研究分野の研究者の照会の依頼が来ることも少なくない。研究者の海外渡航には研究費や補助金が必要であり、その申請のための時間が限られている中で対応し、機会を逃さないようにしなければならない。特に中国との学術交流では、当人同士は何ら問題がないにも関わらず、政治的状況の変化により機会を逃

してしまうこともあることを考えると、オファーがあった際に対応できるような迅速かつ柔軟な仕組みを作っておくことが必要であると思われる。